

1. はじめに

理学部長 林 政彦
理学研究科長 香 野 淳

理学部・理学研究科では、本学部・研究科の教育・研究活動を総括するとともに学内外の人々にお知らせするために、2012年度から「理学部・理学研究科年報」を発行しています。本年報には2023年度の理学部・理学研究科の活動年譜、教員組織、学部・研究科の教育・研究活動、入学志願者の状況や就職状況、社会貢献、国際交流、各学科の研究室毎の活動状況等がまとめてあります。

理学部は1970（昭和45）年4月に応用数学科・応用物理学科・化学科の3学科で創設しました。1976年4月に理学研究科応用物理学専攻および化学専攻の各博士課程を、1990年4月に理学研究科応用数学専攻博士課程を設置しました。その後、1998年4月に地球圏科学科を、翌年4月に理学研究科地球圏科学専攻博士課程（修士課程は1997年4月）を増設しました。理学部は、「数学を含む自然科学領域の探究を通して社会の健全な発展に貢献する」という教育理念を基に、「基礎学力を十分に修得し、自然現象を幅広い視野から理解し、自ら問題を提起し、知識の活用ができる豊かな人間性をも兼ね備えた人材を育成する」ことに努めてきました。また、国際化・情報化、グローバル化の21世紀社会に対応し、既存の学問分野を融合した思考・発想ができる人材を育成するために、2008年4月に文理融合型の人材の育成を目指す「社会数理・情報インスティテュート」と「物理」と「化学」を柱とした「ナノサイエンス・インスティテュート」を設置し、さらに同年4月には応用物理学科を物理科学科に改称する改革に努めてきました。

2023年度の活動で特徴的なことが2つあります。1つは、2020年度から感染力の強い変異株の発生を伴って継続してきた新型コロナウイルス感染症の重症化リスクが軽減する中、2023年5月に感染症法上の位置づけが5類感染症に変更されたことによる、対面を軸とした教育・研究活動の回復です。キャンパスには、学生の笑顔、真剣なまなざしがあふれています。感染症に対する危機意識を保持しつつも、講義・演習・実験、試験、卒業論文発表会等において、遠隔・デジタルコンテンツ、システムを活用しながら、対面を基本・軸とする教育・研究活動を行ってきました。学会活動、野外調査、海外への渡航等、キャンパスを飛び出し社会と連携、交流した多彩な活動を展開してきました。

2つ目は理学部改革です。2021年12月から2023年1月の検討により理学部改組構想をまとめましたが、新設置基準への全学的な対応を2025年4月に行うという方針のもと、改組を2029年以降に先送りしました。一方で、2024年度からのナノサイエンス・インスティテュートの新入生の募集を停止し、2025年度に地球圏科学科に生物・生命コースを設置す

る、情報・AI系の科目を新設するなど、カリキュラム改正等による改革を進めることにしました。研究活動においては、国内外との共同研究や著名な外国人研究者の招聘など国際的なレベルで研究を進めています。また科学研究費をはじめ外部資金の獲得も積極的に行っています。地域の教育支援活動、地域との交流活動も活発に行いました。詳細は本年報をご参照願います。

これらの教育・研究活動は、2023年4月に着任された島倉 裕樹 教授（応用数学科）、大田 晃生 准教授（物理科学科）、末次 翔太 助教（地球圏科学科）、西谷 雄大 助教（物理科学科）、三島 章雄 助教（化学科）、2023年9月に着任された伊東 隼人 助教（応用数学科）2024年1月に着任された富松 由希 助教（地球圏科学科）とともに行われました。また、2023年の教育・研究にもご尽力いただいた、中山 和之 助教（物理科学科）は2024年1月末に退職・転出され、2024年3月末には、黒瀬 秀樹 教授（応用数学科）、西田 昭彦 教授（物理科学科）、杉万 郁夫 准教授（応用数学科）、椿原 晋介 助教（物理科学科）、永留 重実 助教（化学科）、森 和子 助手（応用数学科）が定年退職、江崎 翔太 助教（応用数学科）、塩井 成留実 助教（化学科）が退職・転出されました。定年退職となった黒瀬先生、西田先生、杉万先生、椿原先生、永留先生、森先生は、長年にわたり理学部の教育・研究活動にご尽力いただきました。ここに改めて感謝の意を表します。また、退職されたすべての先生方の今後のご活躍を祈念いたします。

なお、黒瀬 秀樹 先生、西田 昭彦 先生には2024年6月に福岡大学名誉教授の称号が授与されました。

国際交流事業では、2023年度には応用数学専攻にLi Haizhong（清華大学）、及び応用物理学専攻にHaibo Zhang（華中科技大学）をそれぞれ招聘し、大学院生の指導や教員との共同研究を行いました。教員の在外研究が再開されたほか、コロナ感染拡大の状況を見ながら、6名が延べ12回の短期海外研修に赴きました。また、例年行っている蔚山大学との国際交流事業は、対面による実施を再開し、引率教員3名、学部生8名が蔚山大学を訪問し、英語によるコミュニケーション能力の向上と国際感覚の涵養を図りました。学生の海外研修も再開され、応用数学科1年次生1名、物理科学科2年次生2名、化学科2年次生1名が本学の協定校であるグリフィス大学（オーストラリア）、蔚山大学校（韓国）、ハノイ大学（ベトナム）、シアトル大学（アメリカ）で海外研修を受けました。

2023年度の理学部・理学研究科の教育・研究活動の全体及び詳細については、本年報でご確認いただきますようお願い申し上げます。